

ツイッターライブノベルズ

戦獄 ZERO

大槻エリナ編 下



「早く言ってくたさい」(泣)

エリナさん。
これは無料版の
プロローグ編なんで
ここまでなんです。
ははは。

「あれっ!?
ひよっ!?」

「...これで終わり?」

SENGOKU PROJECT



「逃げろ！馬鹿ッ！！」

不意に耳元で大声が響き、体が背後に引っ張られる。

その瞬間、今までかかっていた呪縛がはずれ、エリナは絶叫する。



「きゃあああああああ！！！！！！」



「うるさいッ！」

すぐ側で怒鳴った声の主は、同時に目の前の黒い影から一気にエリナを引き剥がしていた。

力任せにエリナの体を後方へと引っばったのだ。

ぬるり、と粘着質なおぞましい感触を残しつつ、黒い手はエリナの手を滑っていく。

離れた・・・！？

エリナが感じた刹那、彼女の顔の横を、鋭い風のようなものが、勢いよくすり抜ける。

風と共に銀光が、目の前の黒い影に吸い込まれていった。

瞬間、

この世のものとは思えない唸り声にも似た絶叫が影から発せられる。

耳を塞ぎたくなるような、嫌な声だ。

頭から光を受けた影は、後方にのけぞっていた。

多分、そのまま床に向かって倒れこんだに違いない。

その瞬間をしかし、エリナが目にする事はなかった。

再び、強い力で腕を引かれて走り出す破目になったからだ。

先ほどの声の主と思われる誰かが、エリナの手を引いていた。



「だ、誰！？」



反射的に問い掛けたエリナは、相手の姿を見て次に発する言葉に詰まる。

手を引いている声の主、一方の手にはエリナの腕がつかまれていたが、

もう一方の手には銀色に光る細長いものを携えている。

どう見てもそれは、刀だった。

・・・刀！？

エリナは息を呑んだ。

いかにも切れ味鋭そうな日本刀を持っている。

その放つきらめきは、先ほど影に叩きつけられたものと同じのものだ。

エリナはようやく、先刻感じた風と光がその刀の斬撃によるものだと知った。

現実離れした展開に、エリナは思考力を失いそうになっていた。

引張られて、もつれそうになる足を何とか動かして走りつつ、あぐりと口を開けてしまう。

ちらと振り向いた声の主がその表情を見て、くすりと笑ったので、慌てて口を閉じる。

ハッ、とするほどの明るい笑顔だった。



「あんまり気を抜かないでもらえますかね」

たしなめる調子はあるものの、先ほどの怒鳴り声と同じ人物とは思えない程に優しく、そして落ち着いた声音だった。

時代錯誤

張りのある、瑞々しい若い青年の声。

エリナとさして年も違わないように見える。

青年は、走りつつ再びエリナを振り返り破顔する。

屈託のない笑みだ。

エリナの腕を引く彼のもう一方の手には、
ざらざらと光る日本刀が握られているのだが、
何故か青年には、それがよく似合っている。

刀といえば、当然刃物である。

もちろん、カッターのような小さなものではない。

包丁のように、調理をするための道具ではない。

それは明確に、そして純粋に相手を傷つけるための目的を持った武器なのである。

エリナの認識では、それはアブナイ人が振り回すもの、であるのだが。

よく見ると、青年は姿かたちも、何だかちょっとおかしい。

水色の着物を着ている。

袴を佩いている。

そして髪型も・・・。

(これ・・・もしかしてチョンマゲ?)

そうなのだ。

目の前の青年は、ずばり、時代劇に出てくる侍のような格好をしているのだ。

ジダイゲキ・・・

そうか。

それで刀を持ってるのに違和感がないのか、とエリナは妙な納得の仕方をするのだった。

ただし、格好云々を抜きにしたところで、この青年には刀が似合っているようにも思う。

凶器であるにもかかわらず、それを感じさせない程に違和感がないというか、自然なのだ。

体の一部のように慣れた感じがする。

そんな事をぼんやり考えるエリナの腕を、青年はおかまいなしに、ぐいぐい引っ張ってゆく。



「待って・・・そんなに引っ張られたら痛い！」

エリナの苦情に青年はちょっと鼻白んだようだったが、それでも腕を引く力をゆるめない。
だが、青年の手は、同じようにエリナの腕をつかんだ黒い影とはまるで違う。

力強くつかんではいるが、温かみと、
それなりに気をつかってくれているらしい柔らかさがある。

そのせいか、急速に恐怖心が薄れて、エリナは自分の気持ちが落ち着いていくのがわかる。



「あなた、誰なんですか？さっきのあれは、何？！
・・・そうだ、ここ、一体どこなんですか！？」

緊張の弛緩と同時に一気にこみ上げて来たエリナの疑問に答えるかわりに、
不意に青年は立ち止まる。

振り向いた青年の顔が真顔だったので、エリナはたじろぐ。

また最初のように、うるさいと怒鳴られるかと思ったのだ。

あれ？・・・とエリナは思う。

正面から改めて青年の顔と向き合って、なんだかどっかで見た顔のような気がしたのだ。

その既知感を確認したくて、ついまじまじと青年の顔に見入ってしまう。

それは時間にして、たかだか数秒だったに過ぎないが、
青年とじっと見詰め合う状態になっているのに不意にエリナは気づき、慌てる。

青年もその状態に気付いたらしく、一瞬、うろたえるような素振りを見せたから、
エリナは更に慌ててしまう。

思わず、何で顔赤くしてんのよ、ワタシ！と心の中で自分を叱る。

会ったばかりで、そ、そーゆーんじゃないって。

でも、顔が赤くなっちゃってたらどうしよう・・・。。



「エリナさん」

不意に青年がエリナの名を呼んだ。

消えない影



「・・・な、なにッ？」

あっ・・・しまった。

動揺して、反射的に無駄に大きな声で応えてしまった。

(でもあれ・・・？今、この人、私の名前を？な、なんで知ってるの？)

エリナがその疑問を口にするより、青年の方が先に言葉を発していた。



「そんな悠長にしてる場合じゃないですよ。ほら・・・」

彼は、あごでエリナの後ろを差ししめす。



「見てください。」

その言葉に従って、自分の後ろ振り返ったエリナは、思わず悲鳴を上げる。

必死で走ってきた方角、その先の柱の側にうずくまっていたあの黒い影が、今まさに立ち上がろうとしていたのだ。

さっき、この人が斬って・・・やっつけたんじゃないの！？



「あいつらは、倒す事はできても、この場で滅ぼす事はできないんです」

エリナの驚愕に先回りして青年が応えた。

しかし、エリナはその言葉に続けて、問いを発する事ができなかった。

見たのだ。

起き上がった影が、ひたひたとこちらに向って歩き出したのを！

そして更に、別の柱から影がぬらり・・・と出てきたのを！

そんな・・・言いようのない恐怖がじわり、とエリナの背中を這い上がってくる。

エリナの中に、嫌な想像がゆるりと浮かびあがる。

そうなのだ。嫌な予感はあるものなのだ。

当たってませんように・・・そう念じながら、エリナはゆっくりと、左右を見渡す。



「・・・もう！」

さすがに、悪態くらいはつきたくなる。

エリナは自分の想像通りのもの見てしまったのだ・・・。

柱という柱、ありこちの柱から、一体、また一体と滲むように影が現れるのを！！

そいつら全て・・・真っ黒なヒトの形をしたものの、
頭にあたる部分には2つの紅い光が灯っている。

ちかり・・・ちかり、と一定の感覚をおいて点滅を繰り返す。

それはもう、そいつらのまばたきに間違いない。

漆黒の中に血のように濡れ光る、赤い点・・・それが全て、
自分に向けられているのを知って、エリナは自分でも気付かずに、悲鳴を上げていた。

わたわたと真っ直ぐにこちら・・・エリナを目掛けてそいつら全てが前進を開始したのだ。

その速度は、決して早くはないが確実に。

全速力で走れば、距離は十分に離せるだろうと思えた。

倒す事はできても、滅ぼす事は出来ない・・・
青年の言葉通りだとすれば、映画やゲームに出てくるゾンビみたいなものなのか。

ゾンビ・・・ひたひたと歩いて迫る、不死身のモンスター・・・。

黒い影は確かに、ゾンビさながらにのろのろとこちらに向っている。

ゆらり、ゆらりと、その動きは心許無くすら見える。

しかし、あの紅い目は、ひたとエリナにむけられている。

確実に、その瞳にエリナを捕らえているのだ。

決められた刻

そうしている間にも、柱の影から次々に現れ、その数を増してゆく。

もう見えているだけで10・・・いや、20体は越えているんじゃないだろうか・・・。

ゾンビ映画って、どんな展開だったっけ・・・。

主人公の人間たちは、のろのろしたモンスターの群に、
結局囲まれて死んじゃうんじゃないかっけ・・・
エリナは、映画の中での彼らの、ぞっとする死に方を想像をしてしまった。

その、絶望的な悲鳴がはっきりと思い出される。

いくらその歩みが遅いとはいえ、このままじゃ自分も遅かれ早かれ、
映画の登場人物と同じ断末魔の叫びを上げる破目になるのは間違いないだろう。

その時、ぽん、とエリナの肩に軽く、青年の手が置かれる。

びくっとしたものの、青年の手の温かみがずっと肩から沁みってくるようで、
エリナは何故か安心する。

青年は審判のような口調で言った。



「あれから半刻、逃げ延びればあなたの勝ちですよ。ははは・・・」

そんな事、笑いながら言わないで欲しいのだが・・・。



「は、半刻って・・・ど、どれくらい？」

刻とかそんな古めかしい言い回しをされたって判らないではないか。



「・・・半刻は、半刻です」

一瞬、考えるそぶりを見せた青年は、けろりとした口調で言っただけ。

その言葉のニュアンスで、エリナはふと思う。

この人、時間の概念が「刻」でしか知らないんじゃないか・・・

いくらジダイゲキの格好をしてるからって、まさか・・・ホントに・・・知ら、ない？

では、この青年は過去の間人なのか？

あるいはもしかして・・・
私がタイムスリップして、こんなところに来てしまってるのかしら・・・
そう、エリナは思い当たる。

だが、こんな柱だけの風景の場所なんて過去の時代にだってあったのだろうか。

エリナは思いつきをすぐに否定する。

あの柱から出てきた影・・・。

輪郭の曖昧な姿といい、捕まれた時の感触といい、
何よりもかもし出される、おぞましいあの雰囲気・・・理屈抜きで、感覚でわかる。

あれは・・・絶対、生身の人間じゃない。

コノ世ナラザルモノ・・・そんな言い回しこそびったりだ。



「さあ・・・」

青年に促されて、エリナはまた走り出す。

もう、否も応もない。

あんなのにもう一度、腕でも捕まれたら・・・

あちこちの柱から滲み出てくる影たちを避け、青年はきびきびと走るコースを変える。

赤い柱の間を縫うように、二人は何度もターンを繰り返しつつ走る。

青年がコースを変える度に手を引かれているエリナは、人形のように振り回される。

強要される急ブレーキ、急加速・・・。

緩急のあるランニングは、ひたすら真っ直ぐ走るより、かなりキツイ運動だ。

エリナのつく息は、みるみる荒くなってゆく。

一方の青年は息ひとつ切らさない。

どんどん走るスピードを上げていく。

青年についていこうと、エリナも必死に足を動かすが、ともすれば足がもつれそうになる。

やっぱり、これは夢じゃない・・・そうエリナは感じている。

ルール

走る夢なら、これまでも何度か見た事がある。

何かに追いかけて必死に逃げるとか・・・。
時間に間に合いそうもなく、ものすごく焦りながら走るとか・・・。
夢の中でそういう経験をした事がある。

そんな時は決まって、足がとにかく重くって、もどかしくなるくらい動かないのだ。
自分の足が、いや、体全部がまるで自分のものではなくなってしまったかのように、
重く感じられるのだ。

今もエリナの足はフラフラで、かつて見た夢の中と同じように、もつれてしまいそうだ。

だが、足を踏み出した時に体を感じる振動・・・。
膝や、踵に感じるずしりとした、衝撃・・・。
一歩、一歩感じる、曖昧さのない鈍い、痛み。
どくどくと脈打つ、鼓動。
呼吸する度に肺が、悲鳴を上げている。

エリナの五感が、肉体全てが、その痛みが「リアル」・・・現実のものだと訴えていた。

これ・・・夢じゃ、ない・・・。

現実を感じる痛みと苦しさと、エリナはもうフラフラだった。

もう限界・・・。
もう、走れない・・・。

そんな弱音を吐いて、座り込んでしまいそうになる。

それを言葉にしてしまおう・・・。

楽に、なりたい・・・言おう、言っちゃおう・・・。

捨て鉢な決断をエリナが下しそうになった、その出鼻を挫くように青年が口を開く。

無論、走りながらである。



「あれにつかまったら、貴女は元の世界に還れなくなるんですよ」

カエレナイ・・・？

その言葉には、ぞっとする響きがある。

激しい運動によるものとは別のもの・・・恐怖が、エリナの心臓を更に脈打たせる。

耳元に心臓があるかのように感じる。

苦しい・・・気分が悪い・・・。
だが、もう走るのをやめようとは思わない。

そんな状態になりつつも・・・いや、だからこそエリナは聞かずにはられない。
息も絶え絶えになりながら、エリナは前を走る青年の背中に言葉をぶつけていた。



「い、一体・・・あれは...?」



「あれはシキです。」



「・・・シ、キ?」

志気? 四季? 咄嗟に頭で漢字変換してみる。
シキ・・・死期か? それとも何か別の意味が、あるのか・・・。



「エリナさん、先刻柱に触ったでしょう?」



「柱に・・・?」



「それで、シキが出てきちゃったんですよ」

確かに柱には触ったが・・・エリナは思い出す。
おふだをよく見ようとして、ちょっと柱に手をかけたのだ。



「そんな・・・ちょっと触っただけなのに・・・」



「あと、おふだを剥がすとか、ある程度の刻がたつ、とか・・・」

どうやら、シキの出現する条件の事を言っているらしい。



「時間が過ぎたらって、それ・・・じゃあ結局、
どうやっても出てくるんじゃないですかッ!」



「あ、ほんとだ。そうなりますね。ははッ」

まるで他人事みたいに、青年は屈託なく笑う。

こんな状況でへらへらと・・・頭にきてもよさそうなものだが、何故か許せてしまう。
不思議な笑顔だなとエリナは思う。



「・・・あ！」

エリナが唐突に声を上げたので、青年は何かあったのかと振り返る。

少し、驚いたようだ。
笑顔をひっこめて、エリナの顔を見ている。

ナナシのゴンベエ

さっきの笑顔、そして今、エリナを見つめる眼差しに見覚えがある。

そう、この、手を引かれて走る感覚も、前に似たような事があったような……。

先刻から感じていた不思議な懐かしさの理由に、エリナはふと思い当たった。
そうか……この人、同級生だった男の子に似ているのだ。

中学生の頃に仲のよかったあの子に、顔だちが、確かに似ている。
はっきり思い出せないが、そう言えば声も似ている気がする。

しかし、だからといってイコールではない。
目の前の青年は格好はともかくとしても、精悍で、逞しい雰囲気を持っている。

これだけ走っても呼吸を乱さなかったり、
先ほどみせた刀さばきを見ても、実際にかかなりのタフさを持っている。

一方で、エリナの記憶の中の彼は、もっとこう何というか……。
なよっとしているというか……いや、そこまでは言い過ぎか。
しかし、ちょっと頼りなげな雰囲気を持った男の子だった。

弟系？……いや、そうだ！
いわゆる草食系男子、と呼ばれる部類のタイプなのだ。

そういえばいつか、彼の写真を妹に見せたら、やけに食いついていたっけ。
ああいうタイプが妹の好みなのだろうか。
私だったら、頼りがいのある方がいい……と、思う……のだが……。

……そうだ。
思い出した！

中学二年の、キャンプの時……。

肝試しで半泣きになった私の手を引いて先導してくれたの、あの男の子だった！

普段、おとなしい感じの彼が、とても頼もしげに見えてビックリした記憶が確かに、ある。

しかし、どのみちそれは中学生の頃……子供の頃の話である。

当然ながら、エリナと彼との間柄は男女のそれではない。

私にとって、特別な存在だったわけじゃない……。

現に、名前もうろ覚えなくらいなのだから。

名前……なんだっけ……ササ……キ？

いや、違うな？サ……サ……

サエ……そうだ……！



「サエキッ！！」

思い出すと同時に、エリナは大声で呼びかけてしまっていた。

しかも、呼び捨て・・・最悪だ。
声に、青年が振り向いている。



「・・・？」

この反応は・・・

違う、か・・・やっぱり・・・。

それでもエリナはもう一度、声をかけてみる。
怪訝そうな顔で前方に向き直ってしまった青年の背中にむけて。



「・・・サエキ、くん？」



「ナナシ・・・」



「・・・は？」



「ナナシのゴンベエ」

振り向かずに発した青年の声が、エリナの耳朶を通り過ぎてゆく。

ナナシ・・・名無し、か？それが名前ってこと？
エリナの問いかけを待たず、青年は言葉を続ける。



「それでいいです・・・今はね」

全く・・・妙に、意味がありげな言い回しをするものだ。



「名前聞くな、って事ですか・・・？」



「…………」

青年はもう、応えない。

エリナの手を引き、疾走する彼の羽織が、応えのかわりだとでもいうように、
ばさり、と大きく一度、はためいた。

裾に白い三角形の模様がぐるりと入った、すっきりした青…………。

スカイブルーの羽織だ。

たしか、このデザインって…………。

…………新撰組の？

何かの漫画で見たことがある気がする。

コスプレなのだろうか。

にしてはリアルというか、生地が安っぽくないというか…………。

そう、妙な重みと、着物自体に、どこか生活感みたいなものがあるのだ。

青年のその姿が、不意にエリナの視界の中で大きくなる。
何の前ぶれもなく、急に青年が立ち止まったのだ。

シキの群



「わっ！」

スカイブルーが目の前いっぱい迫る！

エリナは、走っていた勢いそのままに、青年の背中に衝突し……

……なかった！

無重力感を伴って、エリナの視界がいきなり回転する。
ざっ！……と、赤い柱の群が縦に、横に流れてゆく！

エリナが知覚できたのはそこまでだ。
次の瞬間、とん……と、足を揃えてエリナは床に着地していた。



「……え？」

目の前に見ていた筈の青年の背中はなく、
かわりに真っ黒なものが下に崩れていくのが視界を過ぎていった。

シキだ！

走っていた二人の前、柱の影から一体のシキが襲ってきたのだ。

瞬間、青年は立ち止まり、走ってきた勢いを利用してエリナの体を自分の背中に
背負うように宙へと跳ね上げ、跳ね上げつつ、片手で迫るシキの体に斬撃を叩きこんだのだ。

一瞬の神業とっていい、青年の動きはしかし、エリナには当然、見えてはいない。
何が起こったか、わからない。

わからないが、どうやら青年に助けられたらしいと判断はできる。



「あ、の……ありが……」



「ちっ！！」

エリナが礼の言葉を言い終わらないうちに、
青年はエリナの肩をつかみ、ぐいっと下に押し下げる。



「きゃッ！？」

押さえつけられたエリナの頭上をぶん、という音と共に風が通り抜ける。

横殴りに払われた青年の刀は、エリナの背後に迫っていた新手のシキの胴を、

エリナごしに切り裂いていた。

どさり・・・！

ものも言わずに倒れ込むシキの姿を認め、エリナは戦慄する。

いつの間にか、シキの群との距離が縮まっていたのだ。
あんなに走ったのに！？

走っても走っても変わらない、柱の林。
その全てからシキが滲み出てくるのだとしたら、どう逃げてもいずれは・・・・・・・・・・。

絶望的な気分が、ふたたびエリナを支配しようとしていた。
現に、右の柱からも、左の柱からも、
いや、柱という柱から次々と黒い影が染み出すように湧き出て来ているではないか・・・！！

そして、エリナのすぐ目の前では、
たった今、青年が斬ったはずの2体のシキがよろよろと立ち上がろうとしている！

そして更に、ぞっとする音が、背後から忍びよっていた。

ひたひた・・・。

振り向いたエリナの目には、追いかけてきた無数のシキの群が・・・！
柱を縫うように、真っ黒い塊がこちらに向かって迫ってきていた。



「くそっ・・・刻限まであと少しだったのに・・・」

青年の眩きが、聞こえる。
完全に、囲まれてしまっている・・・！！
恐怖で、がくがくと膝が笑い出だすのを、押さえることができない。



「ここが勝負所、か」

落ち着いた声が、すぐ横から聞こえる。
振り向いたエリナの顔の側に、青年の顔があった。

何故だろう・・・。
こんな状況なのに、この人の顔を見たら、大丈夫・・・っ、て思ってしまうのは？

シキの群を見据える青年の涼し気な瞳が、僅かに細まる。

エリナを庇うように、その体が一步、前へと進む。

ふっ・・・と、短く、そして大きく息を吸って、彼は刀を腰にすっと引き寄せた。

凜猛な猫科の猛獣・・・そんな連想をエリナにさせる、精悍な、逞しい姿だ。
青年の身体から溢れ出る、濃厚な見えないエネルギーを、感じとれるような気がする。



「エリナさん、僕から離れないように・・・」

こくこくと肯いて、エリナは青年の側へと、一步近づく。

言われなくたって離れるもんか・・・そう、これだけは、確信できる。

ここで青年と離れてしまったら、自分に待っているのは「死」だけだろう。

ひりひりとした緊張は、あっという間にエリナの口腔から水分を奪ってゆく。
身体中から、じっとりとした汗が吹き出る。



「いきますよ・・・。」

青年の身体が一瞬、沈んだように見えた。

定められた標的

次の瞬間、



「でえやああああああああ！！！！！！」

凄まじい雄叫びが、青年から発せられていた。

細身の体のどこからそんな力が湧き出てくるのだろうかと思える、膨大なエネルギー……。

それは周囲の空気を切り裂く鋭さと、全てを圧倒する力強さを内包して……。

エリナには、その叫び一つで、一瞬、シキの群がたじろいだようにすら見えた。

次の瞬間、青年は雄叫びをそのままに、立ち止まったシキの群目掛けて、一直線に斬り込んでいった。

エリナは思わず悲鳴を上げた。



「ち……ちょっと……ッ！」

そんな速さで突っ込んでいかれたら、ついていけない……！！

エリナの不安はしかし、展開された凄まじい光景が吹き飛ばした。

スカイブルーの風が、黒い塊を突き抜け、切り裂いてゆく。
信じられない速さで大群の中に駆け込んだ青年が、次々にシキを斬り倒しているのだ。

きらっ、きらっとして青年の側で銀光がきらめく。
その毎に、黒い影が床へ崩れ、あるいは叩きつけられるのが見える。

青年の技前……

素人のエリナには何が起きているのか具体的に見る事は出来ないが、それでも、そこに巻き起こる一連の動きにほとんど無駄がなく、凄まじい速さと、パワーを感じる事ができる。

それ程に、青年の動きが素晴らしいのだ。

シャープで、そして大胆な……まるでダンスを見ているような……。

青年が巻き起こす旋風が、シキの大群という黒い霧を、ざっ……と、吹き払ってゆく。
(この人、すごい……ほんとに、すごい……)



「エリナさんッ！！」

突然、自分に向けられた叫びに、エリナは、ハッと我に返る。

魅入られるように、いつの間にかぼんやりと、無防備に青年の動きを眺めていたのだ。

青年の目は、エリナのすぐ後ろに向けられていた。
その顔が悲痛に歪んでいるのが見える。

まさか・・・！

振り返ったエリナの顔のほんのすぐ側に、燃える真っ赤な光点が二つ！

ぱちり、とそれが暗闇の中で点滅する。

・・・シキの、瞳！！

赤い光の中に、エリナははっきりと見た。

そのものの、無機質な怨念、殺意、悪意・・・！！

粘り気のある、恐ろしい意思がエリナに向けて照射されているのを・・・！
一瞬でエリナの理性を吹き飛ばすに十分なものだった。

すでに絶叫を上げているのを、エリナ本人が自覚していたかどうか・・・



「だめだ！間に合わないッ・・・！？」

青年の悲痛な声が響く。
闇が凝固したような、どす黒い姿がエリナを覆う！

ぬるりとした感触が、腕に！
怨念の赤い光が、エリナの鼻先に迫って・・・！



「エリナさんッ！！」

遠くで叫ぶ声が聞こえる・・・

もう・・・だめ・・・

終わりの合図

♪～～♪

・・・小さな、音？

メロディ・・・？

これ・・・音、楽？

世の中から、全ての音が消え去ったように、静かだった。
その静寂の中で、たったひとつだけ、音楽が鳴っているのだ。

ボリュームは、さほど大きくはない。
しかし、この雰囲気の中で、場違いなそれは、やけに大きく響いて聞こえる。

これ、は・・・着信音？！

そうだ、これは、エリナの携帯の着信音だ！

耳慣れた自分の携帯の音ではないか・・・エリナは、ようやくそれに気付く。
同時に、エリナはもう一つ、重大なことに気が付いた。

シキの動きが、止まっている・・・？

目の前に迫っていたシキが、ストップモーションのように、ぴたりと止まっているのだ。

おそろおそろ周囲を見やってみると、あれも、これも・・・。

どうやら全てのシキが動きを停止しているみたいだった。

時間が止まったかのようなその空間に、流れる携帯の着信音。

そして、青年の、声。



「刻限か・・・間に合った・・・」

ほっと息を抜き、安堵した気持ちが、その声には含まれている。
固まったシキの群の中から抜け出て、青年はすたすとエリナの方へ歩みよってきた。

側まで来ると、手にしていた刀を鮮やかな手付きで鞘におさめる。
何が起こったか判らず、また、未だ恐怖も興奮も冷めないエリナにむけ、青年は微笑する。



「よかった・・・とりあえず、生き残れましたね・・・」



「・・・」

目まぐるしく色んな事が起きすぎて、エリナには応えようがない。
青年に目で促され、エリナは手にしていた携帯の画面を開く。

一通のメールが、着信していた。

【センゴクのモンは解除されます。ヒトガタの入手が完了しました。ハッケボウは閉じられます】

やっぱり意味がわからない・・・何のことだろう。

ふとエリナは、もう一度、液晶画面に目をやる。
ちらっと、見慣れないものが見えたような気がしたのだ。

画面の端に、何だか見たことのないアイコンが増えている。



「ん・・・？なんだろ・・・」

前にはなかったから、多分たった今、表示されたのだと思うが、白い・・・これ、☆の形？
いや、ちょっと違うか・・・？

もしかしたら青年なら、何か知っているかもしれない。
聞いてみよう・・・エリナが顔を上げた時、まばゆい光が携帯の画面から発せられる。



「わっ！」

小さな悲鳴を上げるエリナ。

これは・・・この光は・・・
ここに来た時と同じもの・・・？

輝く液晶画面の光の中に、☆の文様がちらりと見えたが、
それもすぐに白い光の中に飲み込まれてゆく。



「・・・ッ!？」

光は見る見るうちに、輝きを増し、エリナの視界を覆ってゆく。

青年の顔が、姿がみるみるうちに見えなくなる。

待って・・・と、エリナは慌てる。

何が何やら判らないままだが、助けてくれたお礼も言ってないのだ。
光の中に消えて行く青年の輪郭に向って、エリナは声をかける。



「あの・・・」

そのエリナの声を遮るように青年の言葉が、エリナの耳に届く。

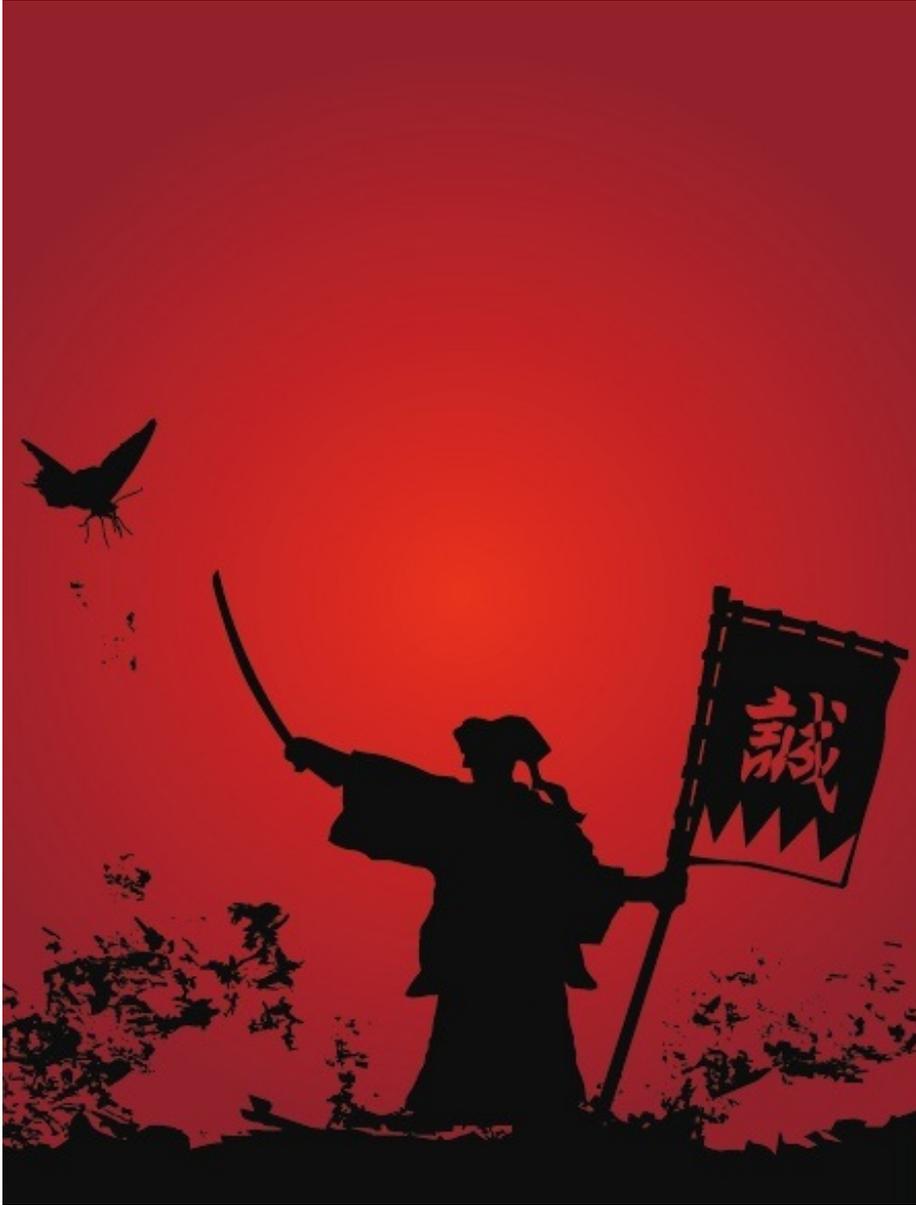


「運がよければ、また会いましょう・・・いや・・・悪く、かな・・・」



「・・・えっ!？それ、どういう意味？」

ま、眩しい・・・ッ!
エリナの視界が光で完全に満たされる直前・・・
光の奥から、青年の屈託のない笑い声が聞こえた気がした・・・。



やっぱり、夢・・・そりゃ、そうだよな。

よかった。

かわった夢だった・・・悪夢とっていいだろう。

もう二度と見たくない類のものだ。

きっと、エリナが時々感じる漠然とした不安・・・

それが夢という形になってしまったのだろう。

このところの暑さで、ちょっと疲れていたのかもしれない。

しかし夢だと判ればこそ、あの忌まわしい情景が、
何だかちょっと懐かしい思い出のようにも感じられる。

夢占いなんてする趣味はないが、それにしてもあのジダイゲキさん、
本当にサエキくんに似てたなとエリナは思う。

夢のあと

サエキくん、か・・・

なんだか懐かしい。



「中学の卒業アルバム、見たくなっちゃったな・・・」

今日、仕事から帰ったら見てみよう。

アルバム、何処にしまったんだっただろうか・・・。

しかし、待てよ・・・エリナははたと、考える。

夢には深層心理が現れるというが・・・という事は、
もしかして自分は、サエキくんの事を心のどこかで意識してたって事なのだろうか？



「ふふ・・・まさかね」

何しろ、名前もすぐに思い出せなかった人なのだ。

そんな筈はない・・・多分。

ぶるっ、と頭を振って否定する。



「いたた・・・」

頭が痛いのを忘れていた。

苦笑しつつ、エリナは手にした携帯をたたみ、机の上に戻す。

その時、ふと、自分の手首を見つめた。

なんだろう・・・

なんだか、うっすら赤くなっている・・・。

赤味を帯びた部分が、細い、四本のラインになっている。

握られたあのような形・・・

ぬっ、

と、伸びてきた黒い手が、エリナの手首をがっしりとつかむ、その、生暖かい感触。



「きゃッ！！」

エリナは、突然、沸きあがった言い知れぬ不快感を振り払おうとして、思わず手にしていた携帯を放り投げてしまった・・・。

夢だったんだよ、ね？

また会いましょう・・・って、言って、た？

ははは・・・そんな・・・
・・・まさか、ね。

エリナの胸の奥で、何かが、ぽこん・・・と、小さな音をたてた。

終

エリナちゃん。
そいつは残念ながら夢じゃないんだよ。

※この話はノンフィクションです。
大槻エリナは実在する人物です。
ツイッターで大槻エリナの「今」をご覧ください。

http://twitter.com/otsuki_erina

http://gree.jp/otsuki_erina